



中国科学院（本部）



中国科学院との調印式



南開大学との調印式

中国科学院及び南開大学との 学術交流協定の締結について

広島大学訪中団

田中学長を団長とする広島大学訪中団（団員：西川理学部長、佐々木工学部長、近藤理学部附属植物遺伝子保管実験施設長、野口事務局長）は、四月二四日から二九日にかけて北京市、天津市を訪問、中国科学院及び南開大学との学術交流協定の締結を行った。
ここに相手機関の横顔、協定締結に至った経緯、交流協定の内容、調印式の模様、今後の交流計画等を報告し、今後の交流の参考にして頂ければ幸いである。



陳維平科学院 日本担当
西川理学部長
近藤理学部教授
田中学長
佐々木工学部長
野口事務局長

南開大学



① 相手機関の横顔

中国科学院

中国科学院は、新生中国建設を推進するため自然科学及び技術科学の中心として一九四九年に創設され、現在、北京を中心に全国一三地区に二三の研究を配し、約九万人の職員（上級研究者・上級技術者一三、〇〇〇人、研究者・技術者三七、〇〇〇人、その他四〇、〇〇〇人）を擁する規模を持ち、中国の自然科学界・技術科学界の基礎分野から応用分野までを所掌・統括する、日本に類を見ない機能と権威を有する巨大組織である。

一三の研究所は、分野毎に数理学系、化学系、生物学系、地学系、技術科学系の五グループに大別される。それぞれのグループは、中国を代表する研究者から選出された委員で構成される学部委員会（日本の学士院）の重点研究方針の下に研究活動を行っている。

中国科学院には研究所の他に中国科学技術大学、研究生院（大学院）、管理幹部学院、文献情報センター、出版社、科学機器工場など二〇余りの付属機関を有している。

る。

中国科学院にとって、今回の本学との協定締結は、日本の大学との協定締結第一号である。

南開大学

南開大学は、一九一九年に中国第三の都市、天津市に創設され、現在は社会科学、自然科学、技術科学、経済学、管理学、法学、東方芸術など二一の学系と一一の研究所を有する、北京大学、復旦大学（上海市）などと並び称せられる中国の重点総合大学である。大学の規模は、

教員数：教授	一二〇人
副教授	四七八人
講師	九〇〇人
計	一、四九八人
学生数：本科生	六、三一八人
修士研究生	一、三〇九人
博士研究生	九三人
専科・夜間学生	二、二六〇人
計	九、九八〇人
課程数：博士課程	二八

修士課程 六四

② 協定締結に至った経緯

中国科学院との関係

広島大学と中国科学院との研究交流は、国交が回復した一九七八年ごろから本学の複数学部の様々な分野で教官個人レベルで開始された。

相手側が自然科学系、技術科学系を中心とした機関であるため、本学側も自然科学系、工学系学部での交流が中心となってきた。

ここ数年間は相互交流が活発化し、総合科学部、理学部、医学部、工学部から年間一〇人前後の研究者が中国科学院の研究を訪問、中国科学院からも研究者を受け入れている。

特に近年は、本学理学部、医学部と中国科学院の研究所との間で共同研究（科学研究費）が行われるなど、より緊密な関係が生まれってきた。

平成二年一〇月、田中学長訪中の際、中国科学院李振声副院長から一層緊密な関係の構築と計画的な交流の推進を行うために、交流協定の締結が提案され、学内で種々

検討し、中国科学院との交渉を経てここに協定締結の運びとなった。

南開大学との関係

本学と南開大学は、共に総合大学である関係で専門分野を通じた会議出席、資料交換などが研究者の個人レベルで行われてきた。

一九八六年、本学の田中理学部長（当時）は、南開大学生物学系陳瑞陽教授（当時）の来訪を受け、研究交流が開始された。その後、陳準教授には、本学理学部から理学博士の学位が授与された。さらに同年、田中理学部長を研究代表者とする共同研究（科学研究費）が開始され、活発な相互交流が続いていた。

平成二年一〇月、田中学長訪中の際、南開大学母国光校長から教育・研究の相互協力と計画的な交流の促進を行うために、交流協定の締結が提案され、学内で種々検討し、南開大学との交渉を経てここに協定締結の運びとなった。

協定締結に至る間、本学理学部附属植物遺伝子保管実験施設長近藤勝彦教授、中国科学院植物研究所洪徳元教授、南開大学生物学系陳瑞陽副教授の御尽力があったこと

とをここに併せて報告する。（国際主幹記）

③ 協定書の調印

中国科学院との調印式

四月二五日前、田中学長以下広島大学訪中団全員は、中国科学院が用意した車で調印式の会場である中国科学院本部に向かった。

中国科学院側は、候自強秘書長（官房長）、薛士毅国際合作局長、張朝行国際合作局処長、邱華盛国際合作局副処長、陳維平日本担当官が調印式に臨んだ。

正面に両国国旗が飾られた楕円形の机に両者相對して座り、二〇分程度懇談の後、一同正面の机に移動し、田中学長と候秘書長が協定書に署名、調印した。

相手側からは、これが日本の大学と初めての協定締結である旨期待を込めた発言があり、改めてその意義の大きさを認識した。

調印式の模様は、中国科学院の新聞に写真入りで掲載、中国科学院傘下の全機関で紹介される。

調印式後、広島大学から持参し

日本国広島大学と中華人民共和国中国科学院
との間における学術交流に関する協定書

日本国広島大学と中華人民共和国中国科学院は、両機関の教育及び研究の協力と交流を促進するため、ここに学術交流協定を締結する。
第1条 両機関は、学術交流を促進するため、次の各項の活動を行うことに努力するものとする。

- (1) 教育・研究用の資料及び情報の交換
- (2) 教員及び研究者の交流
- (3) 青年学生の交流
- (4) 共同研究及び研究会の実施

第2条 前条に定めた活動の具体的内容については、両機関で協議し、合意を得て実施するものとする。

第3条 本協定は、両機関の合意により、いつでも修正することができるものとする。

第4条 本協定は、両機関の代表者が署名した日から効力を生じ5年間有効とし、締結者の一方が廃棄の意思を通知しない限り、引き続き更新するものとする。ただし、本協定を廃棄する場合は、6か月前にその意思を相手機関に通知しなければならない。

第5条 本協定は、日本語及び中国語の本文をもって正文とし、両文書とも対等の効力を有する。

日本国
広島大学長

中華人民共和国
中国科学院秘書長

田中隆荘

侯自強

1991年4月25日

1991年4月25日

たフェニックスをデザインした協
定書調印記念の楯を候秘書長に贈
呈し、すべての調印式行事を無事
終了した。

南開大学との調印式

調印式は、当初四月二七日午前
に計画されていたが、母国光校長
(学長)に急用がで、急遽四月
二六日午後に変更された。

田中学長以下広島大学訪中団全

員と南開大学側母国光校長、藤維
藻教授(前校長)、翁心光副校長、
張自立教務長(生物学系)、逢舘
豊外事処長、周与良教授(生物学
系)、陳瑞陽副教授(生物学系)、
李振漢通訳は、南開大学図書館会
議室で一室に会し、両学長を囲ん
で懇談が持たれた後、別室に移動
して、両学長が協定書に署名、調
印を行った。

調印式後、広島大学から持参し
たフェニックスをデザインした協

日本国広島大学と中華人民共和国南開大学
との間における学術交流に関する協定書

日本国広島大学と中華人民共和国南開大学は、両大学の教育及び研究の協力と交流を促進するため、ここに学術交流協定を締結する。
第1条 両大学は、学術交流を促進するため、次の各項の活動を行うことに努力するものとする。

- (1) 教育・研究用の資料及び情報の交換
- (2) 教員及び研究者の交流
- (3) 学生の交流
- (4) 共同研究及び研究会の実施

第2条 前条に定めた活動の具体的内容については、両大学で協議し、合意を得て実施するものとする。

第3条 本協定は、両大学の合意により、いつでも修正することができるものとする。

第4条 本協定は、両大学の代表者が署名した日から効力を生じ5年間有効とし、締結者の一方が廃棄の意思を通知しない限り、引き続き更新するものとする。ただし、本協定を廃棄する場合は、6か月前にその意思を相手大学に通知しなければならない。

第5条 本協定は、日本語及び中国語の本文をもって正文とし、両文書とも対等の効力を有する。

日本国
広島大学長

中華人民共和国
南開大学校長

田中隆荘

母国光

1991年4月27日

1991年4月27日

④両機関との交流

定書調印記念の楯を母校長に贈呈し、すべての調印式行事を無事終了した。(近藤記)

中国科学院研究所との交流

四月二六日、佐々木工学部長と西川(理学部長)は、中国科学院において、北京地区の科学院所属研究所の代表と交流を行った。中国側からは、数学研究所、物理研究所、力学研究所、感光化学研究

所、化学研究所、化工冶金研究所、地球物理研究所の各代表が参加され、双方からそれぞれの研究活動等に関する紹介がなされた。短時間であったため十分な情報交換はできなかったが、中国側の研究内容は極めて多岐にわたり、かつ本学との学術交流に対する期待が極めて高く、今後具体的研究内容に関する個別の情報交換を進め、共同研究の可能な分野で専門家の派遣等を通じて交流の具体化への努力が必要と思われる。